第８６号
令和6年12月18日
編集責任者　鈴木　祥弘

清里農連通信

発行　清里町農民連盟
清里町羽衣町2番地
TEL 0152-25-3792
FAX 0152-25-3793

産業振興課との意見交換会

9月4日農協会議室にて、産業振興課との意見交換会をおこないました。

今年度(8/1現在)の有害鳥獣駆除頭数は鹿149頭(R5年500 R4年460)、クマ2頭、キツネ23匹、カラス4羽となっています。8月より国有林への入林許可を得て鹿の駆除を実施しているそうです。

鹿柵の設置事業はR4年より順次設置、緑2か所、札弦1か所。R7年は江南でも予定されています。

町域を越えた駆除対策も必要とされていますが、町では町内での対応しかできず、町外での対応はその町に要請しなければなりません。自分も町外に畑をもっていて、自分でデンボク等対策をしていますが、どうしようもならないほどの被害を受けています。この先近隣町村と連携して対応できるようになればいいなと思います。

町ではドローンの導入もされていて、今後鳥獣害対策にもうまく利用できないか検討しているようです。

道路関係は今年から課が分かれてしまいましたが、引き続き支障木の対策や基幹道路の整備等もお願いしました。R6年には4.8km6ヶ所の支障木伐採を予定されているようです。

各地区執行委員からも様々な意見がだされていました。今後もこういった意見交換会がありますので、ぜひ地元執行委員に普段思うことなどつたえていただければと思います。

岩本　将嘉

ホクレン中斜里製糖工場の視察、意見交換会

10月22日にホクレン中斜里製糖工場にて視察、原料所との意見交換を行いました。パイラーにて茎葉歩引きや根腐れ、土砂引きの査定、糖分測定の視察を行った後の意見交換会では、原料輸送の遅れやビート生産の情勢、新品種についてなどの質問があり、それについての説明を受けました。

原料輸送では、町外に作付けしている場合の輸送遅れの連絡がない、輸送遅れの解消、原料の路上散乱防止などの意見があり、それらについて対応をお願いしました。

また、ビートの情勢については交付金の減少などで生産面積は減っていっているが、交付金が下がっても品代が上がっているのでそれほど収入は下がらないので、製糖業側としては生産を維持していってほしいとのことでした。

新品種では、ソラーレという品種が認定されているが採種が間に合っておらず、あと1～2年かかるとのこと。能力としては褐斑病耐性がパピリカ(やや弱)とボヌール(中)の中間ぐらいで、生産性はパピリカと同等で褐斑病耐性がより強い品種となるようです。

最後に、褐斑病の防除回数が以前より増えて農薬代もかかってきていることから、農薬代の助成を要望してきました。

鈴木　祥弘

清里町議会議員との意見交換会

10月17日に清里町議会議員との意見交換会を行いました。
今まで町長や役場産業化との意見交換は実施してきましたが、議会とは初めてとなります。今回は鳥獣被害対策、道路整備対策、農業振興対策についてのテーマで意見交換しました。

鳥獣被害対策については、緑･札弦地区で実施したシカ柵についての話やハンター不足問題、駆除したシカなどの処理問題、それに関わる予算確保についてなどたくさんの意見に対して、議会からはハンターの育成や駆除後の処理問題、助成されているシカ罠設置、ワナ購入、銃購入補助の継続と理解しているが法律や予算がからむので各機関と連携して考えていきたいとのことでした。

道路整備対策については農産物輸送の基幹道路(9線道路)を早期に整備してほしいことの要望。支障木処理についても引き続きの対応と切り方の改善などを要望。議会からは道路だけではなくて橋や畑カン施設の点検、補修保全にも取り組んでいるとのことでした。

農業振興対策では、農家戸数が減少し1戸あたりの面積が拡大し家族経営が限界にきている、新規就農も考えてはなどの意見がでました。議会からは、町と農協の5ヵ年計画のずれをなくしたことや、昨年行政と農協が結んだ地域包括連携協定を締結したことなど、持続可能な農業の確立や食と農を基軸とした経済振興を目指し、課題に取り組むとのことでした。

今回、3つのテーマだけでも時間が足りないくらいでしたので、また機会があれば意見交換会を実施できればと思いました。

林　雄一

北見農業試験場での研修

12月10日に北見農業試験場にて研修を行ってきました。

小麦の新品種の育成方法についてや、きたほなみや春よ恋から置き換えを目標とした新品種の説明がありました。

きたほなみは縞萎縮病がまん延しつつあり収量にも影響があることから、きたほなみと同等の品種特性を持ちつつ縞萎縮病耐性がある新品種として北見99号を育成し、R9年から「きたほなみR」として一般ほ場にてきたほなみから順次置き換えていき、R11年には全量置き換わる予定とのことです。

また、近年の天候の変化で赤さび病の発生が増えていることから、防除が必須になりつつあります。そのため、今まで0回目防除としていた赤さび病防除を1回目とすることで発生を抑える取り組みをしていくとのことです。

小麦の1品種育成には5～10億円かかるが、30％多く小麦が収穫できると北海道全体で約105億円分の増収が見込めるため、新品種育成は非常に重要なことであると思いました。

鈴木　祥弘

オホーツクビーンズファクトリーの視察

12月11日オホーツクビーンズファクトリーへの視察を行いました。
工場内、選別風景、近代的な操作盤、年間通して庫内が10度に保たれた貯蔵施設、とても先進的な工場でした。女満別町に建設された「OKHOTSK BEANS FACTORY HOKKAIDO」は「オホーツク農業の振興方策」をもとに管内14農協が団結し、輪作体系の確立と豆類ブランド構築に向け建設されました。オホーツク管内豆類生産の基盤となるべく、また管内豆類工場の再編のため稼働し、安心・安全な豆類を供給することを目標とし、安定した豆類栽培を継続できるように産地と消費地を結ぶ場となることを目指して建設された豆類専門の施設です。

1 オホーツクの豆類振興

オホーツク地区はこれまで3輪作を中心に行って来ましたが「豆」を加えた4輪作を進めています。
平成26年に計画が始まり平成30年よりスタート、当初の豆類集荷目標は14万5000俵でしたが、集まらずに帯広から豆を分けてもらい出荷したというような経緯もあったそうです。しかしその後順調に集荷が増え令和5年に21万俵、令和6年の今年は25万俵の豆類を集荷。その内の18万5000俵が大豆となっていてオホーツク地区の大豆作付けは拡大増加傾向となっています。北海道産大豆は近年安定的に収穫量を得られており、国内主要メーカーも国内産大豆に切り替える所も増えてきています。

2 安心・安全

安心で安全。そして均質な豆を心掛けています。
農家一件づつサンプルを取り格付けを行いそれを調整、色彩選別、形状選別、金属検出、軟X線異物除去、又、中には手選別を行う豆類もあり均一な品位を保つ努力がなされていました。無駄のないよう網上、網下、最終的に出たクズ豆といわれるものまで選別出荷され、豆は捨てるところが少ないそうです。

3 going forward

令和6年に25万俵を集荷したビーンズファクトリーですが、この施設にも集荷の限界が迫っているそうです。現施設の限界値がおおよそ30万俵、今後の行方を検討した方が良いのではないかという話がでているそうです。大豆の国内産、海外産の価格差が小さくなり、令和10年には現状より20%UPと予測される好調な需要。4輪作をすることでの反収の増加への期待。食料、農業、農村基本計画では大豆生産努力目標34万トンと掲げられており、数量払い品代増加への期待もあります。オホーツクの作付けが大豆に傾いた時には当然手狭になることも予測されます。今後、新工場、増設、面積調整などの展開も予測されますが、オホーツクブランドが構築されつつある今、農連の運動の中で取組んでも良い課題ではないかと感じました。

岩崎　誠

北海道農民連盟　秋闘:畑作･野菜対策中央行動

11月20日～21日道農連春闘畑作野菜対策中央行動に参加した。北見地区から23名、全道で合わせて51名により農水省との意見交換をしてきました。飛行機の都合で北見地区からの参加者は19日に前乗りし、今回の総選挙で初当選を果たした、川原田えいせい衆議院議員の事務所へ行き、今後の活動について話をした。また、清里の役員のみで、篠田なおこ衆議院議員の事務所にも挨拶をしてきた。

20日、農水省との意見交換が始まり、畑作･野菜政策確立に関する要請では、農業の持続的な発展に資する基本政策の確立、米国産生馬鈴薯輸入解禁反対植物防疫強化、畑作物の国境措置の確保、持続的な畑作農業の政策確立、てん菜馬鈴しょ麦大豆対策の5項目で意見交換をした。来年度改定される畑作物の直接支払交付金の計算式も、生産費を下げ収穫量を上げると交付単価が下がることとなり、生産者の努力が報われないので、新たな方式への改善を訴えた。加工用生馬鈴薯の輸入に関して、シストセンチュウが発生していない海外の地区からの輸入を認めているとの事だが、未だ全国で新たな病害虫が発生している事実があるので徹底した防疫体制が必要との要望をした。農水省は小麦･大豆の国産化の推進に取り組んでいるというが、輸入品に押され、又交付金や品代が低いため、生産奨励だけではなく有効な出口対策を求めた。

2日目の21日朝から、北海道選出国会議員への要請を行った。地元に戻って不在だった各事務所にはそれぞれ提言書を置いてきた。

引き続き農水省との意見交換では、野菜対策･食の安心安全に関する制度の厳格化。また、2024年問題については円滑な輸送体制の確立として、畑から工場への農産物輸送は一般の長距離輸送とは異なる形態なので、時期的なものとして分けて考えてほしいと要請した。JR輸送についても赤字路線が廃止の動きがある中、農産物の大量輸送には列車は欠かせない物流手段なので国からの一層の支援を要請した。

今回の要請行動では、次年度改定される畑作物の直接支払交付金の見直しについて、各地区から意見要望が多く寄せられていた。来年度は運動の中心となってくると思うので、これからも安心して営農を続けられ、又後継者が意欲的に農業に参画できるよう、盟友皆様の意思を結集し、このような行動を続けていきたい。

桑島　義幸

編集後記

12月も終盤を迎え、山も畑も冬景色となってきました。

時節柄慌ただしい時期となってきましたので、車の事故等気をつけながら穏やかな年末を迎えたいと思います。

志賀